

ちゅうしんぎしでん

# 忠臣義士伝

〔解説〕 作者、成立時期など正確なところは不明。初演は、初代竹本長尾太夫と伝えられています。忠臣蔵の外

伝といった位置づけで、明治三十年代には人気演目として定着。三代目竹本長子大夫（のちの六代目竹本弥太夫）、豊竹呂太夫などが持ち役にしていました。女流義太夫でも頻繁に上演され、竹本末虎、竹本東広が得意としていました。明治四十年代頃は、内容に若干の違いはありますが「赤垣源蔵徳利の別れ」として、浪曲で盛んに上演されました。

〔赤垣出立の段 あらすじ〕 討ち入りの当日、酒に酔った源蔵が、雪の中、兄の家を訪ねます。玄関にいた若党に、母や兄への取り次ぎを頼み断られるのですが、兄嫁が出てきて招き入れます。母と対面し、旅立ちの暇乞いをする、母は主君の仇討ちを思わぬ源蔵に激怒。そこへ兄が帰宅し源蔵を成敗する槍を突いてかかります。母も刀を取り上げ源蔵を手討ちにせんと見せ、自分の喉に突き立てます。源蔵の本心を知り心残りのないようにと思いやるのです。源蔵は心を奮い立たせ雪の中を出立するのです。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。

## 赤垣出立の段

降埋む雪の野山と人心、よそ目にそれと白妙の、未知踏み分ける千鳥足、酔に寒さも苦にならず顔も、赤垣源蔵が刀の下緒に、ぶら／＼と括り付けたる酒徳利、酒故に身も破れ笠、来かゝる兄の表口

「ヤア、降るは／＼降る雪の面白しとは、一ツ氣の酒より後の心なりけり。其の酔醒めの水ならねど、この降る雪の面白味、下戸は何と、見るであろう。ヤこいつは酒呑みでなきや分かるまいハ、ハ、ハ、ハ、」

と一人言して、ひよろ／＼と直ぐな、しの字の道さへも、ぐの字に歩む玄関先、掃除仕舞て稽古場より立出る若党曾平太、門に人影何者と雪明りに透かし見て

「ヤ源蔵様ではごわりませぬか」

「曾平太か、久しう逢はぬが達者なか」

「へいあなた様にもご機嫌よく、しかしお身受け申しますれば、お旅やつれか見すばらしい御有様、そしてマア酒くさい、やつぱり酒が止みませぬか。イヤ申し源蔵様、御舎兄赤垣源左衛門様は、劍術ご指南の御家柄、数多の門弟が立ち代わり入り代わり、ご繁昌でござります。それに引きかえあなた様、御浪人故とは申しながら、見苦しいお姿で何処へ、お出でなされましたな」

2

「どこへとは曾平太、立ちながら話もできまい、こつちへ来い／＼、マ、聞いてくれ、そちはお国へ飛脚に往た留守中故、詳しい事は知るまいが、あとの月の晦にあつちからも酒代、こつちからも酒代の最速で、掛け取りめらが詰めかけ払うにも文無しよ、詮方つきて俺が差料の小豆長光の刀をこつそりとぶち売って借金払うた、聞こえたかえ／＼。したが案じる事はな

い、この頃友達の世話でさる屋敷へ奉公に有り付いた、

なされませぬか」

ところがその旦那も大酒呑、俺がこの呑助が気に入つて『近々お国へ連れて行く』と御供を云ひ付けられ、遠国へ行かねばならぬ、そこで母や兄貴へ暇乞ひに来たのも錆刀の一腰も貰いたいと思つて、コレ見いこの通り手土産に、一升さげて来たぞ、サ取次ぎしてくれ  
／＼よ」

「イヤ、この取次ぎは出来ませぬ」

「そりやなせ」

「さればでござります、『大病の母を捨て家出せし不屈者、見当たり次第、手討ちにする』と源左衛門様御立腹の折柄、只今お逢いなされては、たちまちお手討、ことにまたその様に酔てござつては、なか／＼お聞き入れはござりますまい、今晚はまずこつそりとお帰りなされませ。イヤ申し源蔵様、ちとマア御酒をお止め

「エ、馬鹿ぬかすなべらぼうめ、コリヤヤイこの源蔵はな、一年三百六十日、元日から大晦日迄、酒に酔はぬ日は一日、半日もないはい、ナニおのれ若党の身をもつて、ちよございな意見立て、エ、すつこんでけつかる」

と叱り付けられ曾平太は、ほう／＼部屋へ逃げて行く。あたりへ響く高声は、例の酒狂と聞き取つて源左衛門が妻のお継、一間より立出で

「コレハ源蔵様ようこそお戻りあそばした、サアマア奥へ」

と兄嫁の、常にかはらぬ挨拶に、源蔵ももみ手して「ヤ久々打ち絶えました、姉上様にも御機嫌よく珍重に存じます。シテ母人の御容態はいかがござりますな」と衣紋繕ひ、威儀改め、打つて変わりし慰勸詞。お継

は猶も笑顔して

「イヤモ御心配あそばすな、この頃はお食事も召し上がり、追い／＼とご全快で御座ります」

「ヤそれは重々、然らば一寸お目通りが致したい、御病架へ通ります」

と行くを引き留め

「マ申しお待ちあそばせ、身受けますれば、この寒中にお襦袢もめさず、お小袖一つ、そのお姿では母様がまたお案じあそばしませふ、いつぞや召しかえさせましたお綿入れ、お羽織やお袴は、ありや皆どうあそばしました」

「エその節下された品々は、ナニ、アノ、ハ、ハ、ハ、エ、折角結構に着せて下された綿入れ羽織、汚しましでは相済まずと存じて蔵へ仕舞ふておきました」

「ナニ蔵とはえ」

「イヤナニ、アノ蔵はござらぬが、ハ、ハ、そうだ腹の中へしつかりと直しておきました、イヤ又、上から着たよりも、腹の中から暖めた方が却つて暖うござります」

と取つてもつかぬ戯言に、酒が云はすかおいとしや、形も薄着の古布子、見るに忍びずかたへなる、綿入れ羽織取出し

「マアこれなりと召しませ」

と打ち着せる気もやわらかな羽二重さはり

「ヤこれは／＼重々のお志、有難うござります、へ、これをやれば又二、三升」

「エ、何とおっしゃる」

「イヤ何アノ、三升／＼、ヲ、それ／＼母のお傍へ参上と申すのでござります」

と何を云うやら、しどもなく、お継が案内に源蔵は徳

利引つさげ打ち通る。早入相の鐘凍る寒さを凌ぐ母親の病架に向かい手をつかえ

「申し母様、源蔵がお帰りでござります」

と取り次ぐ声に、母真弓、屏風押明け起き直り

「ヲ、源蔵か、変る事もないか、今日来やつたは、定めて兄への侘び言であるうがの、ヲ、そうか〜」

と会釈する、慈愛の詞に源蔵は、舌もまわらぬ酩酊を隠す心の切口上

「ヤこれは〜母人様、存じたよりはまず御機嫌の体に、恐悦至極に存じ奉るじや、ハ、ハ、エ、さてと、私事もいつがいつ迄、狼狽ては居られぬと存じて、この度朋友の推挙によつて主取を致し、近日殿様の御供でお国へ出立、はるかな遠国へ参ります、いつ帰国とも相知れず、随分御安泰にいらしゃつて下さりませ、そりやはや、人の子として親、兄への孝行の道は弁えて

はおりますれど、酒に性根を奪はれ、何かと御心労を掛けるばかり、兄源左衛門殿、別してはお継殿の親切、

骨身に堪えていつかな忘れは仕らぬ、イヤナニ忘れぬ

は酒、酒、ハ、ハ、ハ、ハ、〜でした最早母人の御前で、

呑納めに持参仕つたこの徳利、これ今生のお暇乞い、イヤナニ旅立ちのお暇乞いに参つたのでござります

はい」

「ム、しかとその詞に違いはないか」

「イヤモ弓矢八幡かけて何の偽りを申しませう」

と聞くより母は這い寄つて、仏間を開き

「コリヤ源蔵、アノ上壇の御位牌、冷光院殿吹毛玄利

大居士、この御法名よもや忘れはせまいがの、ア、恐

れながら、浅野内匠守様、思いも寄らぬ去年の騒動、

吉良上野が為にやみ〜と御切腹、一家中は皆浪人し

て、散々ばら〜、さりながら御家老始め忠義の義士、

御鬱憤を晴らし奉る企てはありそな物と、そちが帰るを明け暮れ待ち兼ねしに、戻った日から酒の所望、日増に募る放埒情弱、御先祖伝来の刀まで売り払いし不屈者、あまつさえ大病の母を捨て家出し、不孝者め、まだその上に待にあるまじき二君に仕えて手柄顔、見下げ果てた人外め」

と睨む眼にはら／＼と、口惜し涙いとどなほ啖呵は胸に、せきのぼせば、お継も何と取りなさん、詞も涙先立ちて、背撫で下ろすばかりなり。源蔵は空吹く風

「ア、コレ母人、一応はご尤もじゃが、そりや昔氣質の偏屈と申すもの、よう考えてごろじませ、よし又敵討つ所存の者があつてからが、たかの知れたわずかな素浪人、吉良は高家衆の出頭、ことに上杉という大名の尻押があつて、なか／＼近寄る事も叶はぬ／＼、これがほんの蠶螂が斧とやら、及ばぬ事／＼そんな古風

な忠義立てせふより、心よう酒でも呑んで身を養い、長生きをした方がマア、当世でござります」

ときつて放した詞の尖り矢、的のはずれし分別なり。母は怒りの声ふるはし

「エ、おのれ計りはその様な、むさい心はあるまいと、見違うたが口惜しい、親子の縁もこれ限り、きり／＼立つてうせおろう」

と激しき詞、諸共にはたと立てきる隔ての襖。源蔵は、大欠伸

「ア、ヤレ折角塩梅よう廻った酒、母者の長談義で醒めてしもうた、口直しにもう一杯やりたいなあ、オ、有るぞ／＼幸い持つて来たこの酒、傍なる徳利引き寄せて、口から口へ、がぶ／＼／＼ア、甘露／＼、強者の交わり頼みある中の酒宴かな、ハ、ハ、ハ、イヤ又この味計りは、マ堪らぬはい」

と又引へ呑み尽くし、徳利枕に足ふみのぼし、寝るより早く高軒、前後も知らぬ有様に、お継も呆れて詞なし。折から一間に声あつて

「ヤア不忠不孝の赤垣源蔵、兄が成敗、観念せよ」

と手槍引き提げ源左衛門、襖蹴ひらき、無二無三、突いてかゝればむつくと起き抜けつくゞりつ飛鳥の如く、繰り出す槍先引つぱずし、徳利でしつかりと押さえ付け

「ハ、ハ、ハ、徳利酒の肴には、お定まりの塩梅よし、田楽刺しか、芋刺しか、イヤモこのご馳走は食べたも同然、こんな所に長居は恐れ、ドリヤお暇申そうか」

と槍巻落とし、立ちあがる

「ヤレ待て源蔵、用がある」

と刀を杖に母親は、よろぼい出でて声張り上げ

「重々の不屈き、母が手討、覚悟せよ」

と刀をすらりと抜き放す

「コハあぶなや」

と止める嫁、振放し／＼源蔵目がけ寄るぞと見えしが、

我と我がのんどに、がはと突き立てたり

「なふ、何故の御自害」

とお継は驚き抱きかゝえ、すがり歎けば、兄弟もおろ／＼立寄り介抱す。母は苦しき息をつぎ

「ヤレ騒ぐまい／＼、これには深い仔細あり。コリギヤ

リヤ源蔵、今日そちが来たは、敵討の門出、親子一世の暇乞いであろうがな」

「ア、イヤそれは」

「イ、ヤ隠すまい／＼、大望に加担せし身をもつて、

乞いに来る様な、狼狽た性根では、まさかの時、この母に心引かれ、未練な働きあらんかと愛情を断つ我が自害、老いさらばふて、惜しからぬこの身を捨てたは

その方に、手柄がさせたいばかりぞや」

源左衛門涙を払い

「イカニ源蔵、たとえ如何なる事に及ぶとも口外は致すまじき紙の血判、さるによつて、その方、大酒に性根を奪はれたる体に見せかけ、よそながらの暇乞いはすれども、子を見る事、親にしかずと、母人の御明察、よもや違いは致すまい、拙者とても、たつた今汝が手練をよく知つたり、サこの上は、誠を明かし我々に安堵させよ、源蔵」

と星をさいたる兄の詞、源蔵はつと飛びしさり

「ハア恐れ入つたる御賢察、今は何をか包まん、大石内蔵之助殿を始め、一味の義士、四十余人、怨敵上野を討ち取らんと付けねらえども、敵は用心堅固にして、討ち入るべき術なく無念の月日を送りし所、時来つて今月今日、吉良上野の屋敷には、雪の茶会をあい催し、

又夜に入つては、年忘れの会とて、多数の来客、用心油断は今このときと、大高源吾たしかに聞き出し、今宵夜半の鐘を合図に、両国橋にて勢揃えを致し、直ぐに敵の館へ夜討の手筈、首尾よく本望とげし上、御菩提所泉岳寺へ引取り、上野の首を、御墓所へ手向け奉り、その場を去らず、皆切腹との契約、誓紙の表を守り、わざと酒に身を持ちくずし、深くも包み隠せし故、ハ、勿体なき母の御自害、冥加至極の御教訓、忠義に代えし不幸の段、御免なされて下されよ」

勇気たゆまぬ武士も、取り乱したる男泣き。お継はいとど、せき上げ〜

「この四五日は朝夕の、お食も進む様になり悦んでいた甲斐もなふ、思い設けぬこの御最期、武士のお家でないならば、こうした事も、エ、あるまいに」  
返らぬ繰り言口説き立て、口説き立つれば、人々も、



こらえ兼ねたる恩愛の、涙に濡らす、袖袂、絞り兼ねたるばかりなり。様子を聞いたる若党曾平太、一間の内より踊り出で

「ヤア浅野の所縁と知つたる故、間者に入り込む某こそ、吉良の家臣尾林平太、聞き取つたる一々を、上野様へ注進」

と逸足出して、かけ出すを、有合う手槍、源蔵が手練の一突き、平太が最期、虚空をつかんで死してんけり。

源左衛門につこと笑い

「ホ、ウ門出の血祭り最先よし、この手槍こそ先祖赤垣将監殿、数度の戦場にて、数多の敵を突伏せ、高名ありし覚えの業物、敵討の餞別なるぞ、ア、アレ〜  
今打つ時計は亥の上刻、出立の用意〜」

「ハア、然らば御免」

と立ち上がり、納戸の畳引上げて、取り出したる筵包

み、切りほどけば、太刀物の具、いつの間にかは陣太刀に、作り変えたる小豆長光、小具足取つてさつと着なし、重筋鉄の兜頭巾、山道染めたる袖印の忍び装束、小手脚当て、身軽に出で立つ形相は目覚めしくも又、潔し。手負いは今際の声を上げ

「ハア嬉しやゐ、本望や、勇ましいせがれが有様、もはやこの世に望みなし、何れもさらば」

さらばとばかり、にっこりと、笑顔を娑婆の名残りにて、あえなく息は、絶えにけり

「ハア〜」

と泣く嫁。兄弟も共に消え入る気を張り詰め、源蔵は突つ立ち上がり

「唐土の王陵が母にも増さる御恵み、御教訓を頭に戴き本意を遂げんは、今宵の中、直ぐに切腹仕り、後より追付き奉らん、はやおさらば」

と手束弓矢猛心のたゆみなく、出でんとすれど後ろ髪、  
會者定離とはかねてより、知れどもさすが恩愛の、血  
筋の別れ今更に弱る心を取り直し、手槍引提げ源蔵は、  
忠義の道を一筋に、雪を蹴立てて、かけり行く。